

ら、良くない言葉かも知れませんが…まあ各人の置かれているポジションというんでしょうか、ステータスというんでしょうか、社会におけるそれに対応して教育をやりますから、その教育のルート、つまり、小学校、中学校、高校、大学というルートが多能的と言うんでしょうか、複線的と言うんでしょうか、違う訳ですね。こういった話をすると、日本だってつい最近迄、そうだった。特に戦前はそうだったと言うことはすぐお分かりになると思います。戦後だって昭和20年代から30年代の中頃までは、やはり、実業高校は多かったですし、今でももちろん多いんですが、大変優秀な人が実業高校に行かれた訳です。必ずしも今の様に偏差値で行くのでは全然なかったと思います。それはその通りでありまして、イギリスの場合は高い学歴をつける、例えばオックスフォード大学に行っている成績をとったからといって別に金持ちになる訳ではないですね。それから法律家の例を挙げましたが、法律家だってつい最近まで大学に行かなくてもなれたんですね、お父さんが法律家であれば。また会計士もそうですね。ということで、色々と複雑なものが残っていたんですね。ところが日本は明治維新、そして第2次世界大戦の二つの大きな激動によって社会的な身分というものが…完全にはもちろん社会的事実として無くなるわけではありませんが…一応（ ）に入れられた形で教育の結果というんでしょうか、教育によって社会の役割というか、ポジションというものが与えられるという原因と結果が日本とイギリスでは丁度反対になっている。従って、日本は一言で言えば一種のオープンコース、運動会などで皆さん覚えておられるでしょうが、セパレートコースというのとオープンコースというのがありますね。リレーなどで最初はセパレートコースで、途中から20人位のオープンコースになります。日本というのはやはりオープンコースだと思います。自分がどういう生まれであるとか、どういう環境で育ったかということは一応（ ）に入れたまま、兎に角一生懸命勉強して、結果がものを言う。その結果はテープを誰が一番最初に切るかという分かりやすいように試験の結果、点数で表されています。

イギリスの話をもう少し続けますが、日本は学制は6、3、3、4制ですね。イギリスは何かと違いますと、本を読まれば分かるんですが、よく分からないんです。一応、5、5、2、3制と言っておきましょうか。小学校に当たる部分が5年、中校に当たる部分が5年でこれが義務教育です。そのあとに2年ありますが、これは戦前の高等学校に当たると考えてもやられた方がよいでしょう。つまり大学に行くために2年やるんですね。そして、あと3年が大学。但し、医学部は5年です。しかし、スコットランドはこれに当たりません。違った制度をとっています。

この5、5、2、3制というのは大学を念頭に置いたやり方ですから、5年5年を終えた後は、所謂実務的な学校に行く人がもちろん多い訳ですね。その場合には2年であったり、3年であったり、場合によっては1年であったりもします。数字として5、5、2、3と言ってしまいましたが、その実態は一私も自分の子供を入れてみましたが、皆さんが向こうに住まれて自分の子供を行かせてみればすぐ分かることですが、ある学校は5、5だったり、4、6だったり、あるいは2、3だったりばらばらなんですね。

イギリスの学校というのは公立と私立の場合が日本だとすると、その10倍位の差があります。公立の場合は国立の場合と地方の場合と、半分、地方から援助というか、半分独立、日本言えば私立ですがの場合、両親が出す場合もあります。教会もあります。これも完全に教会でやっている場合と、イギリスには国教会がありまして、これは国の公認宗教ですが、カソリックも当然あります。カソリックなんか完全に自分でお金を出してやっているというようにこのように大変複雑です。

しかし、複雑だからそこというか、複雑にも拘らずというか、非常に客観的な統一の「ものさし」があります。それは15才が終わった時点で受けるG.C.S.Eという試験と、大学を受けるために必要なAレベルという試験と、これは全国共通でございまして、つまり公立でこようが、教会立でこようが、6、3でこようが、2、6でこようが、全部15才を過ぎれば、このG.C.S.E試験を受けなければ次にあがれません。

これは有名な話ですが、ダイアナ妃はこのAレベルはおろか、G.C.S.E試験すら何科目しか受からなかったということで例え、王族、彼女の場合は貴族ですが、貴族、王族もこの「ものさし」で測られてしまいますから、非常に厳しいことになります。日本は学校制度は極めて簡単ですね。よ

堀川正幸君 先日は日中友好のツバサに参加させていただきました。大歓迎を受けたうえ、観光に買物に大変楽しい旅行をさせていただきました。感謝！

山崎勲君

梨木建夫君 北鼓隊の出席率が悪いようですので毎週木曜日全員出席がたて前ですので16日（木）の練習には笑顔で参加して下さい。鬼軍曹の稲田コーチが手ぐすねひいて待っていますので……。決してコワクはありません!?

山本充君 葛西教授新潟よりありがとうございます。

米山忠俊君 葛西教授卓話ありがとうございます。歓迎申し上げます。

ロータリー財団ボックス：

山上茂夫君 葛西教授の卓話に感銘を受けたいと思ひませ。卓話有難うございます。

江口悟君 葛西先生卓話よろしく願ひいたします。

イライラボックス：	14日現在累計 2,000円
-----------	----------------

卓話：ロータリー財団月間に因んで「最近の大学教育改革について」一日英の比較—新潟大学法学部教授 葛西康德先生（学友会事務局）

皆さんこんにち新潟大学法学部の葛西と申します。私の出身は四国の香川県と言うところであります。12年前に新潟大学にポストがありましてまいりました。新潟大学法学部と言うのはあまり歴史がございせんで1980年、昭和55年に当時の人文学部が3つに分かれまして経済学部と法学部と人文学部（文学部）と出来まして十数年ですので、県内での卒業生の方も旧人文学部を別とすれば、まだ少ないかと思ひますし、残念のことでもあるのですが最近の法学部に関しましては県内勢は3割弱でございまして、悪いときは2割位しか入って来てくれませんで、それは新潟大学法学部に魅力がないからかもしれませんが、約％以上は周辺の県、遠くは関西から来ておられる方もございます。こんなことで我が法学部の内容をお話しますと同時に法学部のパンフレットをお配り致しました。

大学もこれから競争の時代に入って来ました。特に国立大学と言えどもあんのんとはしてられないと言うことで大学における法学部全体のアピールを兼ねております。ちなみにインターネットも入れておりますので、もしアクセスされる方は法学部を打って下されば、私の顔も出てまいります。

さて私はご紹介頂きましたように1986年からイギリスのブリストル大学と言う所で2年間程勉強させてもらひはした。実はその当時私はイギリスに出掛けて勉強したくてしようがなかったのがなかなか良い奨学金が得られずロータリークラブに応募しました。ロータリークラブと言うのは皆様は入っていらっしゃるからそれ程「ピン」とこないかもしれませんが一般の人々のイメージと言うのは、1つは色々な記念碑とか……そう言ったところにライバル団体がございまして……そう言った記念の物がみられることと、今一つは、何んと言つても奨学金、「ロータリー財団」でございまして。これは外国人にとってはもっとはっきりしておりましていわゆる米山奨学金と言うのは大変良い奨学金でありまして新潟大学に勉強に来てゐる中国人の留学生をはじめとして大変恩恵をこうむつております。私もそう言うわけでこの奨学金に当りましてイギリスのブリストルという所で生活、かつ勉強させて頂きました。家内と当時2才でありました子供をつれてまいりましたが…イギリスのブリストルの宣伝を致しておきますと、ロータリーの地区で言ひますと1100地区、昔は110地区であつたのですがロンドンから西に約100マイル、約160km行つた所で、私はとても良い

所だと思います。観光地化して外国人や観光客に有名なところが必ずしも良い所ではありませんで、ブリストル付近は、特に観光地と言いますと、例えばお風呂の語源となりました「バース」、お風呂のことを「バス」と言いますが、あの基になった、ローマ時代からの町「バース」と言うのが直ぐ近くにありすし、「ウスターソース」と言うソースの中に「ウスターソース」と言うのがありますあれはイギリスの「ウスター」と言う町で造られたソースであります。陶器に感心のある人は「ウェッジウッド」なんて言う陶器をご存じの方がいらっしゃるかもしれませんがイギリスの有名な陶器は大体この「ウスター」のあたりで造られておりましてこれがロータリーの1100地区即ち私が出掛けた所であります。

丁度10年近く前ですが11月はこう言う月間でありまして私もあちこちのロータリークラブで講演を致しました。大変良い思い出になったと思います。さて、今日のテーマは大学教育改革と言うことなんですけれども、思ったより時間が沢山頂けるようでちょっと驚いたんですが新潟でお話するときは時間がきつくて15分位しかなく……そう言う分けではありませんが多少大学を含めたイギリスの教育一般についても話させて頂きたいと思います。

良くイギリスの事について書かれたものを読みますと例えば本屋さんに行ってイギリスと名の付く本はいくらでもあります。一つ二つご推薦申し上げますと、岩波新書から出されている森島道夫と言う有名な経済学者・ロンドン大学の教授が書かれた「イギリスと日本」これは続もあります。それから続続もありますがこの先生の本は少し硬いですがに世界的経済学者らしくきちんとした統計を踏えた信頼にたるものであります。それ以外にも最近林〇〇と言った人が随分書かれて出ているんですけども別に林さんの悪口を言うつもりは全くありませんが多くのものはどちらかと言うと自分の個人的な体験を書いたものが多いので、それが全てその通りであると言うふうには思わないで読まれた方が良いでしょう。少し眉に唾をしていた方が良いでしょう。唯、そういったことを念頭においた上でイギリスの教育は一般的な評価として非常に自由で個性をのばす教育であると言われる。それに対して日本の教育は画一的で個性をつぶす教育をやっているふうに批判されます。大体、比較という程怪しい学問はないんでありまして、仲々二つのものを、特に自然科学と違ひまして社会の制度、価値感、法律もそれに拘わるわけですが、申し遅れましたけど私は法学部の中で専門と致しておりますのは法律の歴史であります。特におよそお金とは縁のない分野でございまして古代のギリシアとかローマとかこう言う時代の法律を勉強させてもらっております。それは間接的には日本の法律と言うのはドイツとかフランス、戦後アメリカの法律を基に作られておりますが、そのドイツやフランスの法律が元々、ローマ或いは哲学的にはギリシアの影響を受けていると言うことで間接的には日本にも大変関係があると言う分野であります。ちょっとお話が前後致しましたが、或る社会の制度とか思想などと言うものを比較するものはもう大変難かしい、特に危険なのはどちらかの制度の建て前とどちらかの制度の現実を比較してしまうことなのです。特に日本人が陥ち入り易いのは私自身も含めてですがつい最近まではそんなにちょっとよく外国へ行くことは不可能であったのです。ほんとうに財力に恵まれている方、或いは外交官を別にすれば一般の人が外国に行って自分で生活したり現地の方々と話をするのは難しかったのです。従ってともすれば教育に限らず日本の教育の現状とイギリスの教育の建て前と言う本に書かれたものを大きく比べられて結論的には日本はいかんとイギリスはいいんだとこう言ったたぐいのものが多かったように思います。そのことを間引いたとしてもこの様な評価と言うものはやはり当たっていると言えなくもありません。

それはどうしてそう言う評価が出てくるのだろうかと言うことを考えて見る必要があると思います。ちなみに日本ではこうも言われます。初等教育、中等教育、小学校、中学校の日本の教育は素晴らしい…と、これは世界の人々がそう言いますし、日本人もそう言う人がかなりおられます。

例えば中学卒業時の試験、例えば数学の試験をやってみれば日本はだんとうにレベルが高い。例えばイギリスに旅行されてお店で買い物をするとお店の店員さんがいかにも心もとない計算をする。彼らは、彼女らは、たし算しか出来ないのではないのであろうかと言う感じが致します。

仮に100円で物を買う、68円とすれば、日本ですとすぐにひき算ですが、向うは69、70、71……

とたし算をしながらおつりをくれますのでたし算しかできないのではないだろうかと言う位心もとない非常に遅いそんな印象をロンドロやパリで買い物をされた方は受けたのではないのでしょうか。やはりそれは真実でありまして中等教育までの教育の水準はすばらしい。しかし大学を中心とした高等教育は何んたることかと言うお叱り、批判を最近受けております。

一番判かり易いのはノーベル賞の受賞者の数ですが、研究に費やした予算に比較してノーベル賞がもらえると言うことはもちろんありませんが、日本の科学技術に関する予算と言うものは莫大なものでありましてこれを持ってしても何年かにいっぺんしかノーベル賞が出ないのかと外国人に皮肉を言われる位、日本の高等教育が批判されます。逆にイギリスに関して言えば高等教育はすばらしい、しかし初等中等教育は問題があると言われる。このような評価、或いは現状に対する認識と言うものはいったい何処からやって来るのであろうか、何故、そうなんだろうかという風に思われる方は多いと思われます。ちなみにイギリス人と日本人と言うのは、私はブリストルで2年間生活しましたが、その後も縁がありまして私自身論文を書いておりますので一年に一度は必ず向うに出掛けて論文を書いてあちらの先生に読んで頂くということではほぼ毎年行かせてもらいました。

先月から2週間程、別の用で出掛けてまいりましたがそれから一昨年、これも幸運でしたが別の財団で一年間オックスフォードに留学させて頂きました。従って合計すれば3～4年位向うで住んでいることになるのですが、そう言う経験を踏えて申しますと、予想以上に日本人に近い……これは言葉の壁が少しずつ乗り越えられて来ますと……単純に申しましょう、イギリス人は大変「シャイ」であります。「はにかみや」です。私は日本人もそうだと思います。初めて会った人に対して、日本人は距離をおく、しかしだんだん付き合いが長くなればその都度、親密になって来る。この様な人間関係の距離のおき方はイギリス国と日本人は似ているようです。決してアメリカ人のように初対面からだき合ったり、握手したり、ファーストネームだけで呼び合ったりすることはないので、一見イギリス人は冷たいと言う人がおりますが、それは一度しか合わない人に対してそうするのが日本人であると言うのは普通であると思います。そんなことを含めてだんだん親密になって来て文化的な近さを実感するようになるのですが、教育に関してはどうしてこんなに違うのかと言う位、日本とイギリスでは両極端であります。

その理由は何故かと言うことでございますが、これはまあ私は歴史を勉強しておりますので、ひとつ歴史に原因があるのではないか。どうということかと申しますと、イギリスという国は確かに産業革命を世界でいち早くやってあたかも現代の社会の基礎となる自由、民主々義、人間を平等に扱って、各人の政治的権利、経済的能力を平等に認めるという、そういった思想が発生したかの様な印象を受けておりますし、私もまた大学で、いや高校からそういった勉強を受けましたけれども、確かに経済という点ではイギリスはヨーロッパのどこよりも世界進出を果たし、植民地を持っていたんですが、その社会構造というのは意外に維持されたままである。

もっと申しましょう。つまり身分制というものは意外に根強く残っている国でございます。つまり身分制と言いますと、すぐ、お前は保守的だとか、封建的だと言われますが……敢えてそう言われれば、私はそれで結構ですが…つまり、各人には各人の生まれた状況というんでしょうか、環境がありまして、その環境に対応した形で教育というものが為される。例えば親が弁護士、法律家であれば、子供は大体その道を選ぶ。親が医者であれば大体その道を選ぶ。従って労働者、例えば所謂、親が教育を受けていない労働者であれば、あまりその子供の教育に関しては…日本はまあそうではないということですが…あまり、自分がそう骨身を削ってですね、子供に総ての投資をして、子供に自分と違った仕事に就かせたいというふうにはあまり思わない。そういうことはむしろ不幸である。という発想、そして、それに見合った社会的現実というものが比較的最近まで、即ち、サッチャーの政権になるまで維持されていた。一番分かり易い例が炭鉱労働者ですね、あるいはイギリスでは今でも国鉄が残っていますが、その国鉄労働者ですね。…ちなみに私の父親は国鉄に勤めていたんですけども、私には兎に角、お前は勉強していい大学に行けと小さい時から言われてきたことを覚えているんですが…イギリスの場合はあまりそういうふうには言わない。つまり最初にその人その人の身分というんでしょうか、まあ身分という言葉は法律上あるわけではあませんか